

千代の古道（二）

土田龍太郎

昨日の淵は今日の瀬となるかの飛鳥川のしばらくも定めなきに擬へむまでこそはかたからめ、世のなべてのいとなみ諸行無常のことわりを出づべからずとせば、古への道の萬代かけて同じからむことさらにたのむべからず、時移るにまかせて、もしはあらぬ方にそれゆき、もしはまたさながら衰へ廢れてありしにもあらずなりなむことげにさがたきわざなればさしもあやしむにたらず。

人のなりはひ暮しぶりの改まるにしたがひて、昔よりありきたりし道のやうやくたよりあしくなりもてゆけば、あらぬすぢに新に道を啓かではあるべからず。かくてなりし今の作り道、本の道よりかへりてにぎはふにつけて、その上は名に立てりし古道さへいつしか人の行き來と絶えがちになりて、つひにはけだものの走ることだにまれになりゆけるためし少からざるにいたり。

四方のけしきのなつかしさに、させるあてどはなけれども、ただはるかなる尾上の雲をはかりにさまよひありきたらむに、木の下蔭や草の茂み、ことにきはだてることこそあらね、草生へるさまのここかしこまばらがちにてよそには異れば、いかにぞやよしありげに見ゆるところにふと至ることなきにあらざるめり。ゆかしさつので心をつくれば、足あとこそはしるからね、その上の人のかよひけむ細道のごときもの、半ばあまりは埋れたれどはつかにたどらるる心地するぞおもしろきこといはむかたなし。

これぞげになべてのものの見がてにすなる昔人の歩めりし古道のはかなきなごりなるべけれど、ただ絶え絶えなれば定かにそれとも知れがたく、あるにもあらずなきにもあらずありやなしやの見えがくれにて、夢心地と言はばさすがにことわりすぎたらめ、しばしがほどは現し世のほかに出でぬるやにも思ひなされるればくすしあやしといふもおろかなり。かかるをりは、われをたちまち驚かす鳥の一聲さへつねよりはことに聞ゆるぞをかしき。

さてもはからざるにかかるところにまぎれ入りぬるはただごとならず。ただめでたしおもしろしとばかり言ひてやみなましかばなほなほざりならまし。これぞげにちはやぶる神の御魂の下したまへるさきはひにほかならずとせば、かしこきことたとへむものなかるべし。

（令和三年四月二十日受附）

